

「私たちの仕事は、少年たちの心の扉をいかに開かせていくかが大きなポイントです」。少年たちへの矯正教育について、高原寮の法務教官で首席専門官の登内誠一さん(50)は、そう説明します。

「教育は、する側、される側の信頼関係がなければ全然存在しないに等しい。少年矯正施設

心の扉

有明高原寮の格子が撤去されたのは、その前身で昭和21年に開設された民間の保護施設「松本少年学院」の時代。格子にすがりつき涙する少年たちの姿が処遇に悪影響を及ぼすと判断され、開設して間もなく取り払われました。

そしてこの出来事は、寮の明るい雰囲気を出さきつかけとなり、地域との交流にも拍車をかけることにもなります。盆踊りや野球大会、除雪作業など地域と交わる機会は次第に増え、いつの間にか、少年たちは「学院のお兄さん」と呼ばれるようになっていました。

「私たちの仕事は、少年たちの心の扉をいかに開かせていく

かが大きなポイントです」。

少年たちへの矯正教育について、高原寮の法務教官で首席専門官の登内誠一さん(50)は、

そう説明します。

「教育は、する側、される側の信頼関係がなければ全然存在しないに等しい。少年矯正施設



雨が心配されましたが、雲の切れ間から晴れ間が見えてきました。運動会開始前、子どもたちはリラックスした表情。

あれは見せかけだろうか。 本気だろうか。

「全国の施設を転任してきましたが、少年院という施設の多くは迷惑がられていました。ある所では大変な建設反対運動もありました。ですから、だいぶ緊張しましたよ」と大平さん。

しかし総会では、住民から反対どころか、建設の必要性を理解している様子さえうかがえませんでした。大平さんは、これまでの転任地とは違う雰囲気を感じ取りました。

そして、次に違いを感じたのは、その数週間後である4月末、穂高会館で毎年開かれる「安曇野早春賦音楽祭」での出来事でした。

この音楽祭では、少年たちが「鐘の鳴る丘男声合唱団」として常連で出演しており、この年も出演が決まっていました。地域を代表するイベントに入寮者全員で出席することは全国的には異例なことです。

なので、「信用はするけど油断はしないぞ」という構えも持っています。根底にあるのは、やはり「信頼関係」と言い切りません。

少年たちが非行に走る背景には、多くの場合、家庭の不安定

さがあるとされます。家庭は、生活のよりどころとして機能し、成熟した人格を形成するための基本的な能力を身に付ける大切な場となります。例えば、乳幼児期には、親に抱かれたり、世話をされたりするうちに、赤



運動会のほかにも、三九郎（どんと焼き）や盆踊りが住民とともに行われています。

「入場すると、大きな拍手で迎えられました。私は当初、少年たちがまともに歌なんて歌えるのか心配していました。しかし、知らなかったのは私だけで、少年たちはこの晴れの舞台に備え、何日も前から練習を重ねていました。少年たちの順番となり、合唱が始まるとその精一杯の歌声は見事なハーモニーとなり、私自身も言葉を失うほど胸が一杯になりました。そして迎りを見回すと、ハンカチで涙をぬぐう女性の姿が見え、次第に同じ姿が広がっていくのが分かりました」。

大平さんはこの時、あらためて、少年たちは大きな可能性を持っていることを知りました。

そして、人から避けられ、嫌われてきた少年たちを地域の人たちが温かく迎え入れ、歌声に涙まで流してくれたことに衝撃と感動を覚えました。

ちゃんは、他者への「信頼感」をしっかりと身に付けます。

罪を犯した少年たちが、自己の問題と向かい合い、自らが持つ疎外感や被害感、劣等感を取り除いていくためには、この信頼感を身に付けることが必要です。それには、施設の更生プログラムのだけでなく、地域住民との生身の交流が大きな力となります。

「ここは、格段に地域の人たちの交流が多い所です。実際に少年たちは口々に『普段でない経験ができた』と話します」と登内教官。この開放的処遇は、施設から飛び出す危険性など、保安上のプレッシャーも伴っていますが、退寮生の低い再犯率など、その効果は社会が多様化し、複雑化する現在であっても変わることはありません。

「少年たちが置かれている社会的状況は変わってきていますが、人間自体は変わったとは思えません。今、高原寮で行っている処遇も2、30年前からずっとやってきていることです。それが今の少年たちにも生きています」。